



《議事内容》

議題 1:最近の活動について

■「桑田佳祐のやさしい夜遊び」特別番組

サザンオールスターズ『THANK YOU SO MUCH』完成披露プレミア試聴会「#サザンと夜遊び」放生送

TOKYO FMをはじめとする JFN 全国 38 局では、サザンオールスターズの NEW オリジナル・アルバム『THANK YOU SO MUCH』の完成を記念して、2025 年 2 月 22 日（土）、『桑田佳祐のやさしい夜遊び』の放送時間を拡大した特別番組、“サザンオールスターズ『THANK YOU SO MUCH』完成披露プレミア試聴会「#サザンと夜遊び」”（22:30～23:55）を生放送でお届けしました。

日本ラジオ放送史の中で、発売前のアルバム作品をフルで 全曲オンエアするのは史上初。生放送で、桑田佳祐氏がパーソナリティをつとめました。

radiko 等でのタイムフリー聴取機能は一切なし、当日 1 回限りでの放送。radiko では、リアルタイム同時接続者数が一時は前週比 10 倍になるなど大きな反響となりました。

## 議題 2：番組視聴

### 【番組名】

『クインシー・ジョーンズ追悼特番～the music comes first～』

2025 年 2 月 24 日（月・祝） 13:00～14:55 放送

### 【番組概要】

本日ご視聴いただくのは、2月24日（月・祝）に放送した『クインシー・ジョーンズ追悼特番～the music comes first～』のダイジェストです。

この番組は、2024年11月3日、91歳でこの世を去った稀代のスーパープロデューサー、クインシー・ジョーンズの追悼特別番組として制作しました。

ミュージシャン、プロデューサーの2つの顔をもつ TENDRE をパーソナリティに迎え、クインシー・ジョーンズのプロデュースワークに注目しました。そして、松任谷正隆、武部聡志、Yaffle という日本を代表する3人の音楽プロデューサーがクインシー・ジョーンズの非凡な才能を紐解きました。さらに、AI を使って、“もしクインシーが生きていて、TENDRE をプロデュースしたら？”という試みなどを交えながら、休日午後の放送ということもあり、クインシー・ジョーンズの手掛けた音楽をゆったりと聴いてもらうことを意識してお届けしました。



#### TENDRE

ベーシスト・ギタリスト・キーボーディスト・サクソフォーン奏者・マルチプレイヤー・シンガーソングライター・音楽プロデューサーでもある河原太朗のソロ・プロジェクト。アーティストとクリエイター両方に実績があり、クインシー・ジョーンズの音楽との親和性も高いことから今回パーソナリティに起用。



#### 松任谷正隆

音楽プロデューサー。4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃(バンド)活動を始める。20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、バンド“キャラメル・ママ” “ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。



#### 武部聡志

作・編曲家、音楽プロデューサー。一青窈、今井美樹、ゆず、平井堅、JUJU等のプロデュース、ドラマ・映画など数多くの作品の音楽監督等、多岐にわたり活躍している。



#### Yaffle

作・編曲家、音楽プロデューサー小島裕規のソロ・プロジェクト。大学在学中より作曲家・編曲家として活動、藤井風、iri、SIRUP、Awesome City Club、adieuほかのプロデューサー/編曲を精力的に行なっている。

【委員の意見および社側説明】

〔○〕委員意見／〔■〕社側意見

○番組で使用した楽曲を聴いて、これも、あれも、クインシー・ジョーンズだったのかとびっくりした。昭和の下世話な番組のテーマ曲としてよく覚えていたものもあって「そうだったのか！」という純粋な驚きがあった。映画の「キル・ビル」でもすごく印象的に使われていたが、こういう優れたインパクトのあるものは、オマージュやパロディで、どんどん元のところから離れて使われていくものなんだということに改めて感じた。

○冒頭の最初の印象的なフレーズなど、これがクインシー・ジョーンズだったのかと聴いている人の心を掴みながら、じっくり各プロデューサーの視点で解説していく構成で、必要なところに必要な音があり、プロデュースという言葉に普段接しない人でも分かるようすごく丁寧、親切に作られた構成だった。音楽のプロデューサーが実際にどういうことをしているのか、なかなか知る機会がない。実際の曲を聴き比べたりすることによって、こんな感じなのかも、と興味を持てるような内容で、2時間とても楽しく拝聴した。

○TOKYO FM は追悼番組をよく制作している。偉大な足跡を残した方にリスペクトを込めて、その時に必ず良い番組を作るのはすごく大事なことで、他のメディアではなかなかそういうことができている中で、たっぷり時間を使って制作していることがまず素晴らしい。

○私もそこまでクインシー・ジョーンズに詳しい訳ではないが、全体としてすごく分かりやすい構成。企画としては、以前に拝聴した追悼番組のように、死者が蘇ってラジオ局を開いたという設定などなく、割とオーソドックスに作られていて、その分すごくわかりやすく、この MC のテンダー氏の声も聴きやすく、構成もわかりやすく、そして解説者として出てくるプロデューサーの方々もそれぞれの視点で多面的に浮き彫りにされていて、大変学べる番組だった。

○この番組で一番いいなと思ったのは、過度にわかりやすくしすぎてないところ。プロデューサーの方々それぞれのプロとして、クインシー・ジョーンズのいいところを挙げていて、「こんなこと言っても分からないだろう」ではなくて、プロとして「ここはしっかり言いたいんだよ」という部分をきっちりと言っていた。これがテレビだと、わかりやすくしなくてはいけないと思うが、この番組では、分からなくても良いからちゃんと言っていてそれがとてもいいと思った。プロがそう言っているんだなっていう感じがして、分からない部分も気持ちいいなと思って拝聴した。

○AI が Tender の曲のアレンジをしたが、Tender の曲をあまり知らなかったのも、誰もが知っている曲とかでやってもらった方が、クインシー・ジョーンズのアレンジがどうかより印象的に感じられたと思う。

○私がなんとなく自分の音楽体験としてクインシー・ジョーンズと認識していたのは「We Are The World」と「Thriller」くらいだったので、本当にどの曲も「これも全部そうだったんだ」というのにすごく驚いた。知らないうちにクインシーの曲が自分のなかに入っていたので「いつ出会ったか分からない」と武部氏がおっしゃっていたが、音楽に疎い私でもまさしくそうで、「テレビ三面記事 ウィークエンダー」のテーマが「アイアンサウンド」だったことに驚いた。「オースティン・パワーズ」や「愛のコリーダ」などを本当にたくさん聴いていたので新鮮な驚きがあった。

○番組を通してクインシー・ジョーンズの多才ぶりが余すところなく、また飽きることなく、楽しみながら学びながら本当にワクワク聴けた。日本を代表するプロデューサーの方々の視点も交えながら、シンプルで分かりやすい構成だった。選曲もバラバラで、そこにまたクインシー・ジョーンズのそれぞれの魅力も語られていて、非常に聞き応えのある部分だったと思う。

○Yaffle 氏が言っていた、いい管理されてるお祭り感の話などは、言語化がすごく上手いと感じた。プロデューサーとしての信念というか、クインシー・ジョーンズが確実にやりつつ、でもそのアーティストの自由は存分に引き出すという仕事ぶりみたいなものがいろんなプロデューサーの言葉やエピソードによって、視聴者にもわかりやすく伝わる、とても素晴らしい構成だった。

○これまでに聴いた追悼番組が、しっかり聴き込まないと、という構成だったのに対し、この番組は割とさらっと聴くことができ、ながら聴きの人にも受け入れられやすいのではないかと思う。Tendre 氏の声も聴きやすく、あまり音楽に詳しくなくても聴ける構成だった。

○AI のアレンジについては、AI がクインシーの曲を学んだ上でやっているわけではないので、そこはちょっと違うのかなと思った。もし、仮に AI を使って何かをするんだったら、AI がクインシーの曲を学んで、その人が今の時代にいて新しいものを作るならどうするのか、という時に AI というものが生きてくるのでは。

○クインシー・ジョーンズの仕事が、日本の音楽界を代表すべく選ばれた後進同業者 3 人にとってどう受け止められ、彼らの人生とどう重なり、そこから 70 年代後半以降の日本の「音」がどう変わったのか、という点に制作の目論見があったように感じた。世代的にリアルタイムでクインシーとほとんど重なるところがない若

手の音楽プロデューサーを MC に採用するチョイス自体は間違っていないが、「感動」「すごい」「さすが!」「ならでは」を連呼するしかできない（しない）Tendre氏は底が浅く、番組に厚みを与えることができていなかった。武部氏のパートは難なく原稿を読み上げている風で、平凡な解説に終始。Yaffle氏は自分のキャリアと重ね、自分の言葉で思いつくままに語っていて好印象。選曲した Walking in Space がナイスチョイス。松任谷氏は「3D」な音風景をキーワードにクインシーの音作りを詳しく具体的に紹介しながら自分が Matt Forger 氏と組むまでの流れなどを描き、楽曲制作を通して体得したクインシーへの思いを淡々と、虚ろな感情表現をいっさい排除して語っているパートが番組中、一番の聴きどころだった。選曲したロス五輪「体操」競技へのオマージュも秀逸。

○クインシー・ジョーンズの肉声が聴きたかった。番組の主旨が日本の音楽シーンへの投影だから仕方がないかもしれないが、音楽以外の人生のエピソードがどう音楽に力を与えたのか、例えば 70 年代以降の貧困青少年に対する彼のアクティビズムが 2004 年の We Are the World にどう結実したかとか、単なる音楽の神様として崇め奉るだけではなく時代を切り取るのに最も適した人物を、それこそ 3D に浮かび上がらせる努力を払って欲しかった。

○追悼番組って大体どうやって作るかっていうと、エピソードとかを散りばめて、いろんな人の証言を入れるのが王道かと思う。その一方で、クインシー・ジョーンズの曲は大体みんな知っている。たくさんあるので 2 時間、大量に曲紹介するだけでも成立する。文章で生きている人間は「We Are The World」のエピソードみたいなものをいっぱい並べて、関係者の証言をつけてっていう形の文章構成にするだろうなと。ラジオでただ曲を並べるだけだと面白くない。かといってエピソードとか関係者の証言みたいな話を盛り込みすぎると、テキストとしては面白いけど、ラジオなのにもったいない気もしてしまう。その狭間で、おそらく現代の音楽との接点みたいなところを考えて、こういう構成したのではないか。ただ、Tender も Yaffle も大好きでほとんど毎日のように聴いているミュージシャンだが、一般的には Tender ってあんまり知られてないのでは。だからと言って、2020 年代の音楽においてみんなが知っているのは一体誰なんだろうと。みんなが知ってる人にクインシー・ジョーンズが語れるのかと。そうすると、こういうネオソウル分野でトップランナーである Yaffle とか Tender が出てくるのは、妥当な選択だと納得する。個人的にとってもいいなと思った。

○プロデューサーの仕事っていうのは譜面にもならないし、かといってリック・歌詞でもなく、一般の人には馴染みがない。そこで、Yaffle とか Tender、もしくは松任谷氏のセリフはなかなかコメントが効いていて、例えば Tender 本人も Yaffle のコメントで紹介していますけど、よく管理されたお祭り感とか、でっかい包容力のある世界にプレイヤーを連れ込んでいく感じという、オープニングスペ

ースを紹介している。いわゆる空間があって、そこに祝祭が詰められているのがクインシー・ジョーンズの特徴であるってことを、Yaffle は的確に説明していて、Tender もそれと同じようなことを言っている。AI で Tender の曲をクインシー・ジョーンズ風アレンジしたらどうなるか、まさに「うおお、これは Tender のメロディーは、クインシー・ジョーンズがやっている感じがするな」と、結構劇的に私は感動した。松任谷氏も 3D であると、前後にいろんな音があってそれがうまいことコーティングされ、とにかく立体の中に入ると言っていた。この番組の狙いは、若手プロデューサー 2 人が説明することによって、クインシー・ジョーンズのプロデュースとは何なのかが言葉と音楽両方で説明されることを効果的に発揮することにあつたのではないかと、非常に面白く拝聴した。

■ありがとうございます。結果的にはこの 3 人からコメントを頂いてよかったと感じている。Tendre を知っているか知らないかは、世の中普通に言ったら知らない方がたくさんいるのかなとか思いながらも、やはり今、リアルタイムで活躍されている人ではあり、かつ、声の素晴らしさもあって、彼の声で語ってもらったので起用した。AI の試みは、やってみないと分からないと思っていたが、最初に彼のオリジナル曲をかけて、歌詞を AI ソフトに入れて、いろんなクインシー・ジョーンズに寄せるようなキーワード、楽器とかアレンジのワードを入れてみて、同じ歌詞でもプロデューサーが変わる、作り手が変わると、こんなに印象が変わるということが、結果的に少し表現できたらと思って 2 曲使った。Tendre 自身も楽しんでくれて、ここはちょっと番組で使用したという意図があつた。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「ドライバーズインフォ」

3月29日(土) 5:55~6:00 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>